相談ネットワーク通信

2023.5.12(金)

Ｎｏ.123

子育て・教育なんでも相談ネットワーク

700-0822　岡山市北区表町1-4-64 上之町ビル３Ｆ

ＴＥＬ・ＦＡＸ　086-226-0110　Ｅメール：soudan-net@vivid.ocn.ne.jp

ホームページアドレス　http://www.soudan-net.sakura.ne.jp

忘れ残しのあれこれ⑰

～思い出すままに～

難波一夫

希望をつむぐ

昔の人（中国の五行思想）が人間の一生を青春・朱夏・白秋・玄冬の四期に分けたのに当てはめると、ぼくは今「玄冬」の世代に入っている。玄冬の玄は黒。季節でいえば冬。一番生きていくことの厳しい世代を象徴しているのではないだろうか。冬は次へのエネルギーを蓄える季節でもある。玄冬に希望がないのではなく、希望を失ったとき人は老いるのだと。

振り返れば、ぼくは十五年に亘る戦争の真只中を生きてきた。そして、玄冬の今、走馬灯のように思い出す事々の一つ一つがとても大切に思える。そして、その中から希望を紡ぐ力が湧いてくるのを感じる。

なかでも、１９４５年年６月29日の岡山大空襲、その年の８月15日の戦争の終わった日、新憲法の公布された１９４６年11月３日。

それらの日々。希望を紡ぐものをそこから改めて見つけ出したい。

岡山が戦場だったとき

ご真影と教育勅語を護れ

１９４５年６月29日、夜半、岡山市はＢ29の空襲を受け、大損害をこうむった。

その夜は、蒸し暑かった。

当時、中学４年生であったぼくは、空襲が近いからと、学生服を着て、足にゲートルを巻いて寝るように指示されていた。だから、朝になると、脚がパンパンに腫れあがっていた。

それは、学校の奉安殿に置かれている一番大切なもの、すなわち「天皇の写真と教育勅語」をいつでも護るためだと教えられていたからである。

雷のような爆発音と地響き

「空襲だ、空襲だ！逃げろ！」の声。母は位牌と米と貯金通帳をリュックサックにつめて

いた。
焼夷弾や爆弾が落ち始めた。どうやら近くにあったカネボウの工場（現在の山陽学園）がやられているらしい。
「早く逃げよう」親子四人布団をかぶって東山公園の大きな椋の木をめざした。母は病み上がりで、とてもシンドそうだった。
爆発音、火柱、照明弾、にわかに周囲が明るくなる。
泣き叫びながら家族の一群が走りぬける。
大きな椋の木のところで、左に行くか右に行くか、左に行けば東山電停の方、右に行けば玉井宮の方、一瞬の判断がいった。
「玉井宮の方に行こう」。父の言葉で歩き始めた。
「私は、シンドイからここに残る」と母が言う。
「何を言うんじゃ、死んでしまうぞ」
父とぼくとで玉井宮の鳥居から母を支えながら懸命に上った。
突然、シュル！シュル！シュル！
思わず、「危ない！」、母を片側の草むらに突き飛ばした。ぼくは石段に這いつくばって伏せた。
シュル！シュル！シュル！頭上を焼夷弾が落ちていく。すれすれに落ちていく。過ぎた、行った。思わず振り向くと、鳥居の近くで爆発して燃えているのが見えた。
後で分かったのだが、そこに同じ町内の一家族がおられ、石段を上がりかけたその時に焼夷弾の直撃にあわれた。そして四人が亡くなられ、二人が重傷を負われた。

事実をしっかりと受け止める

岡山市の焼け出された人１３万人、焼かれた家２万５千戸以上、町内は９６戸のうち８０戸全焼

この日、岡山市全体では市街地の６割以上が焼け、死者１千７百人以上、傷ついた人６千人以上、焼けた家２万５千戸以上、焼け出された人１３万人以上と大損害を受けたのである。
わが家は完全に焼失した。
焼け落ちた家々の前に立ち竦んで「これでわが家は終わりじゃ」と呻くように言った父の声を忘れることはない。

焼け跡の青空教室

この大空襲で学校は完全に焼失した。
時に授業があっても教室がない。そこで、焼けた天守閣から少し離れたところにある「月見やぐら」の屋根の下で勉強した。
教科書も、ノートも、鉛筆もなく、先生の口述による講義であった。
なんの授業だったか、和辻哲郎の「風土」を紹介してくれた先生のことをよく覚えている。
その時、授業よりも気になったのは、雨が降ったらとか、木から落ちてくる虫とか、日陰の場所はどこだとか・・・。実際に夕立がきたり、虫が落ちてきたりするのはしょっちゅうであった。
その後、まもなく屋根のあるところで授業ができるようになったのが市の公会堂跡であった。
行ってみると、外観は残っているが、大屋根が落ちて、所々にその残骸が散らばっていた。屋根が残っていたのは舞台だけで、そこに机を乱雑においてあった。前よりはましだとだと思ったが、吹き降りの時には授業を中断して休憩しなければならなかった。
その後、伊島小学校の教室を借り、やっと落ち着くことになった。が中学４年生が座れるような机や椅子ではなかった。
先生の講義は口述から板書に変わったが、もちろん謄写版も印刷機もない。ノートも無いから、紙を見つけるのも大きな苦労であった。
国語の授業で芭蕉の紀行

文を板書したのを丸写しした。ほんとうに時間がかかる授業であった。

着の身着のままで

母親の実家を頼りに、着の身着のままで岡山の街を離れた両親は、どんな気持ちだっただろうか。

配給で配られるものは、全て子どもたちのためにと。そうしなければ中４と中２の男子は生きられない。

父は、実家の離れに一室を借りて、全く経験のない商売のマネゴトをはじめた。病弱な母と一緒に。

ぼくは、自炊の生活がつづいた。その頃、風邪気味で微熱がつづいていた。診断を受けたら「親のところに帰れ、そして治療を受けなさい」といわれた。

ある大雪の日、膝のあたりまでの雪を掻き分けながら、相生橋を渡り、岡山駅にやっと着いた。客車ではなく、貨物車で、みんな立ったまま。

ようやく、家にたどり着いた。泣きながら

「お母さん、病気になった」

横になっていた母は、話を聞いてくれ、元気そうにして、泣きながら一言いった。

「心配するな。お母さんの力で治してやるからな」

母は、空襲の時の石段からの落下で体調がよくなかった。それでも力いっぱいの声を出してみせた。

くすりなし　かねなし　たのしみあり

スッポンもまむしも

当時、結核の新薬といわれたストレプトマイシンもパスもなく、ザルソブロカノンの静脈注射くらい。その注射液も薬品の品質管理のせいなのか、注射が終わってしばらくすると、身体に「震え」がくる。看護婦さんに手を握ってもらいながら我慢を重ねた。

そして、両親は人から「スッポン」がいいからと聞けば、しっかり食べて早く元気になれとすすめ、「まむし」がいいと聞けば、粉にしてハッタイ粉に混ぜて食べさせてくれた。

患者第一号

主治医の独身の先生は、激戦のつづいたフィリピンの戦線から帰国され、村にできた診療所の医師になられた。

ぼくは、患者第一号になった。

先生は、寝たきりのぼくに世間のことを色々伝えてくださった。進駐軍が日本に来たこと。天皇が「人間宣言」をしたこと、天皇がマッカーサーに会いに行ったこと。極東軍事裁判が始まったこと。そして日本国憲法が公布されたこと・・・。診察が済んでからの先生のお話は、いつも新鮮で知的好奇心を煽られた。時には刺激が強すぎて、熱が出るようなこともあったが、内緒にしていた。

ずっと天井と向かい合いながら、先生の話を反芻していた。その頃の何よりの喜びであり一番の楽しみであった。

でも、なぜか戦地の苦労話は聞けなかった。ぼくはどうしても聞きたいので母親に「先生の戦争の話が聞きたいのにどうして話さないのだろう」と尋ねたら、「きっとひどい目に遭われたのだと思うよ。うちの家だって空襲の話はしたくないじゃろう。」

それからは先生の口から話が出るまで「待とう」と思った。

天皇の人間宣言

ある日、診察に来られた先生が、「天皇が人間宣言をしたんだ」と言われた。ぼくは、度重なるわが家の不幸に「神も仏もない」と先生の前でこぼしていた親の顔をチラッと見た。

やまぐち判事が死んだ

新聞報道で裁判官が栄養失調で亡くなられたのを知ったのはこの頃であった。山口判事は現行の配給制度では生きていけないということを身をもって証明してみせたのだ。ものすごく感動して微熱が出た。

天井の節穴を見ながら、ぼくもこんなことができるかと自問自答した。結核だから栄養を摂れと親も先生もいわれる。でも、「闇の食べ物」を手に入れないと生きていけないのだ。

春めいて

春めいたその頃、村では「小豆島のお大師めぐり」が始まった。講仲間の数十人が団体で島の「お大師さま」を参詣するのである。

伯父さんは世話役で、ある時母といっしょに枕元へやってきた。

「お大師様に参ってくるから、お前も行こう。杖と『同行二人』の菅笠をかぶって立ちあがれ」

「立てるかな、痩せてしもうて・・・」

母は泣きながら「頑張れ、がんばれ！」をくりかえした。

「お大師さんが守ってくださるからな」

震える足元を見ていると、お寺にある屏風絵の地獄の人間の様子とソックリだと思った。

ドクター、家族、親族みんなの懸命の治療と介抱により、少しずつ好転しはじめた。

朝、ドクターがわが家の前を通勤される。そしてまず新聞による世間話を教えてくださる。そしてそのあと往診に来られたら、その解説をしてくださる。それが楽しみで早く来てほしいと願っていました。

なんば　かずお

「ねばならない」の逆襲？

相談員　山本　和弘

４月５日付拙ブログに「『ねばならない』の逆襲、の巻」という記事を載せておりましたら、当ネットワーク相談員の加戸さんに『発見』され、「ネットワーク通信で紹介したら？」とそそのかされました（笑）ので、その気になって、一部を抜粋・再編集して掲載させていただきます。それ故、前号で予告していた「モズに寄せて」の記事続編は、回を改めることにします。

かつて、高教組が、ある教育提言を示そうということで、私もその検討委員の一人に加わったことがありました。１９００年代の終わりの頃、思えば前世紀のことでした（笑）

（中略）この「提言」づくりにむけて議論を進めていた段階で、たたき台としての素案に、次のような文章を用意したことがありました。

この点について、「子どもの人権読本」（エイデル研究所）は、次のように述べています。

「今日の学校の競争的性格は、子どもの生活をまき込んで時間や活動の面で抑圧しているだけではありません。彼らの自己評価を、他者との相対比較の世界に閉じ込める形で抑圧しているのです。そして、多くの子どもたちが否定的な自己像・自己否定感を押しつけられ、国際比較統計でくり返し結果が出るような彼らの自信のなさとしてあらわれているのです。」

この指摘は、私たちが日々の経験を通して実感している子どもたちの印象と、ぴったり符合しているように思えます。

日本の学校は「自尊心泥棒」？

日頃よく「最近の子ども・若者は、我慢強さに欠ける」「甘やかされて育ったために、自分本位でわがままな子が多い」などの嘆きを耳にします。それ自身、確かに根拠のある指摘ですし、関連して「安易に子どもに迎合せず、より高い段階への成長を保障するためにも、要求すべきことは厳しく要求すべきだ」という意見も、教育の本質に照らして、大切な観点でしょう。

特に、「新学力観」の席巻する学校現場では、「個性重視」の名のもとに、必要で可能な手だてや指導を軽視または回避する傾向が顕著となっているだけに、真に子どもの成長を願う立場からの、「厳しい要求」と手厚い援助は、かつてなく求められています。

しかし、同時に、子どもたちが「厳しい要求」に応えて一歩成長していくためには、「ありのままの自分が愛されており、無条件に受容されている」という実感が、根底になくてはなりません。

ところが、いま、日本の学校は、その主観的意図に反して、往々にして「自尊心泥棒」（斎藤学・『高校の広場』22号）として機能している場合が少なくないのではないでしょうか。

性急な学校

・教育というものは、子どもの前に少しがんばったら跳べそうな「飛び箱」（課題）を置いてやって、それを跳ばせることによって子どもの成長・発達を導くという性格を本質的に持っている。「ここまでくれば、次はその上を」というのが教育の宿命なのかもしれないが、今日の学校においてはそれがあまりにも性急に過ぎるのではなかろうか。

・人間しんどい時には、甘えたり逃げ出したりして心のバランスを取り、心を癒しながら生きているものである。ところが学校には、常に「前向き」に「もっと、もっと」とがんばらないといけないような雰囲気がある。甘えたり逃げたりして後退することを許さない。それを「後ろ向き」の姿勢だとして、ただちに否定的に評価するところがある。

・子どもを成長発達させるためには、常に「前向き」に取り組ませないといけないとでも思っているのであろうか。――「講座学校」第４巻一章（高垣忠一郎）

子どもたちの人権やプライドを無視した嘲弄や、体罰を含む居丈高な叱責などは論外としても、たとえ善意であったにせよ、学校や教師のあまりにも性急な「要求」が、子どもたちを追いつめ、萎縮させ、衰弱させている側面をも直視しないわけには行きません。

昨年度、各校の協力を得て高教組が実施した「高校生意識調査」では、学校生活の中で「人間として大切にされているという感じ」を「持っている」と回答した高校生は21.4パーセントに過ぎません。「少し持っている」の40.5パーセントと合わせても、約六割の生徒しか「大切にされている」と感じていない学校状況の薄ら寒さに、鈍感であってはならないでしょう。

「人間として大切にされる」上で、「強く求めるもの」を尋ねたのに対して、第一は「のびのびとした生活」、第二は「意見をきちんと聞いて」、第三は「まるごと認めてもらえる」の順に回答が集中しており、つづいて僅差で「えこひいきやシカトがないこと」「息抜きや休みの時間」などがあげられています。

いま、当面さしあたって、これらの声に応える「学校づくり」こそ、緊急に求められているのではないでしょうか。

自己肯定感が充足されてこそ前向きに行動できる

１９９５年の全国教研集会で、小１から９年間登校拒否してきた少女が、次のようなレポートを発表しています。「ありのままの自分でいいのだと思えるようになってから、自分が好きになった。そうすると楽になれて、あれがしたい、これがしたいという気持ちも湧いてくる。とにかく今は、自分が満足のいくように毎日を過ごしていきたい」。

臨床心理学者の高垣忠一郎氏は、この発言を引用して、子ども（人間）が前向きに動き出すためのポイントを、①「ありのままの自分」を受け容れ認められるようになれば、自分を肯定し好きになれる。②そうすれば、自分からあれがしたい、これがしたいと、いろんなことに取り組む自発的な意欲が湧いてくる。という二点にまとめています。（講座学校第４巻「子どもの癒しと学校」１章）

東京のある母親が、『定時制高校の灯を守れ』都民集会で行った発言にも、同様の感慨があらわれています。

「定時制に来て、定時制ってこんなにホッとできるところなのかとつくづく思った。中学時代には息子は『完全不登校』でした」「ここでは時間がゆっくり

流れていく。昨日まであくせくしていたことが、どうでもよいことに気がついていく。ある時、息子が喜んで家に帰ってきて『先生から廊下で、K君、きみの今日の黄色いシャツとても良く似合うよ、と言われた』という。このことが嬉しくて嬉しくて私に話す。私は、ああこの子はこれまで日常のあいさつもない中で過ごしてきたんだなと思った。こうやって『自分自身が自分のままでいいんだよ』と感じれるようになれる学校。そして人前に出るのがイヤだった子が、劇もやり心も癒される。自信を見いだし、社会に出たときその力が発揮できるようになる学校。この学校に来れてよかった。」（山田功氏「東京の高校統廃合・再編政策の特徴と矛盾」『高校のひろば』27」より引用）

全ての学校が、こういう役割を果たすことは、不可能なのでしょうか。

自分が受容・肯定できたら

「ねばならない」で脅され、「自分はだめな子だ」と自分を責め、負い目や罪悪感を背負わされている心は、自分を防衛するために「ヨロイ」を着て、その中に自分を閉じ込める。そういう状態では防衛のために心のエネルギーを費やし、前向きに心のエネルギーを使えない。（中略）負い目や罪悪感から解放され、ありのままの自分を「自分が自分であって大丈夫」と受容し肯定できるようになって前向きに心が動き出す。「ねばならない」の枠が外れて「～したい」と心が自由に動き始める。そのときはじめて、自分を防衛するためでなく、自由な心で真に自発的能動的に自分の人生や成長に向かってチャレンジしていけるのである。（――講座学校第４巻１章　高垣忠一郎）

長大な引用になりましたが、今日の記事に関係するのは最末尾の部分（だけ）です（汗）。

「ねばならない」で生きるのではなく「～たい」でラクに生きられる世の中をみんなで作れたらいいなと思っています。ある人の言葉で言うと「must」ではなく、「want」で生きるということ。――と思いつつ、日々「must」に追われる毎日です。

一つは、一斉地方選挙。私の居住地域では、大軍拡・大増税を止め、くらしをまもる三人の県議・五人の市議候補を、是が非でも当選させねばならないということ。これは半ば「must」で、なかば「want」。いや比重的には「want」がまさりますから、そのための努力は苦ではありません。

時に、ビラまきなどは、一度に一時間程度、数日かけて配れば、健康増進につながりますし、日々彩りを変える桜の花や、春の気配を楽しむことができて、「want」の度合いが高まります。ほかにもいろいろな「must」がわが身を圧しつぶそうとします。

その中でも大なるものは、四月からの町内会の役員。しかも、数字嫌いの私に会計係ですよ。先日、三時間ほどもかけて引継ぎを受け、大量の書類と、ズシリと現金・預金通帳の入った金庫を譲り受けました。年度替わりの時期なので思い立って金庫の内容確認と当面の会計処理に着手してみようと、金庫の鍵を回すも、…開きません。困り果てて、前任者にHELPを訴えましたが、彼は勤務時間。ようやく夕方になって、ダイヤルキーの解除の方法を探り出していただきました。無意識にダイヤルを回してしまっていたらしいのです（汗）。

――追伸――

そうして、いったんは事なきを得て、要請された会計処理をなんとかこなすこ

とができホッと安堵したのでしたが、何ということでしょう、今日またまた、開かなくなってしまったのです。教わっていたダイヤルキーの解除方法を何度やり直してもうまくいきません。ダイヤル数字の微妙な合わせ位置が間違っているのだろうと思って、色々試してみても・・・駄目。と、何かの拍子に、開いたは開いたのですが、蓋を閉めるとまたロックがかかってしまう。これの繰り返しの果てに、ようやく気づいたのは、ダイヤルをあわせるべき数字の位置がわずかにズレているらしいのです。このダイヤルキーは動かないようにテープを貼り付けて固定することにしました。

ほかにも、あれとこれとこれ、気鬱な「must」が入れ代わり立ち代わりわが身を苛みますが、「ケセラセラ」、「なんくるないさー」と、やり過ごしたいと思います。いやはや出だしからさんざんの新年度です。

やまもと　かずひろ

わたしの一冊

秋山　正美

『坪井宗康詩論・随筆集』

坪井あき子編

わたしは、詩人であり小学校の先生であった坪井あき子さんを、ネットワークや諸活動の中で知ることになりました。彼女の詩や文は、温かく、時に力強く私を励ましてくれます。ところが、わたしは、彼女のパートナーである詩人坪井宗康のことは、彼女の出した本を通して初めて知ったのです。

新聞記者時代からたくさんの文章を書き、時代を直視し、なおかつ「詩の世界」を極めた詩人だといわれた宗康。

坪井宗康は六冊の詩集を出しましたが、この『詩論・随筆集』は、多量の残された原稿や、詩誌などに発表していた作品の中からまとめてあき子さんが出したものです。二年前にも、『坪井宗康全詩集』を発行しています。二冊のセットで５３年という短すぎる人生を駆け抜けたパートナーの生きたあかしになればと願ったものです。

坪井あき子さん自身も八十歳代後半で、なおかつ精力的な創作活動をしながらの出版には頭が下がります。

この本の最後には、宗康さんや、家族・友人との思い出の写真がたくさん載せてあります。若き日のあき子さんや永瀬清子さんにも会えますよ。

なかやま　よしき

わたしの戦争体験記

今を3回目の世界大戦前夜としてはならない

相談員　田中　博

母の一言が運命の分かれ道

１９４５年８月12日、三歳八ヵ月の私は、一歳の弟を背負った母と新京（旧満州国の首都で現在は中国吉林省長春）駅にいました。ソ連軍が満蒙の国境を越えて侵攻し、関東軍や行政機関の幹部たちが飛行機などで早々と本土（日本）の逃げ帰った後、取り残された開拓団の人々、多くの日本人の本土への逃避行が始まったのです。父の勤務先であった関東軍庶務課の家族（女・子ども）約20人と朝鮮経由で日本に帰るためです。父を含め、男性たちは再召集され、梅花口などで兵役についていました。

「ご主人のいる梅花口に行かれますか」駅の係員の問いに、母は「皆さんと一緒に日本へ」と帰国組に加わったのでした。この時、父のところへ行っていたら、私は死んでいたか、残留孤児となっていたでしょう。母の一言が運命の分かれ道でした。

平壌で一年間の足止め

新京駅を無蓋車（屋根がなく馬や牛を運ぶ貨車）に乗って南下しました。８月14日、一昼夜かかって平壌につきました。町は引揚者であふれていました。

１９１０年に、大日本帝国は韓国を併合していました。朝鮮半島は北緯38度線を軍事境界線として北をソ連軍が、南を米軍が占領しました。38度線を境に米ソの軍隊が対峙したため、引揚者の南下は不可能となったのです。

やっとの思いで平壌までたどり着いた人々は学校や教会、日本人の家庭に宿をとりながら、南への脱出をうかがっていました。母と私・弟は教会に身を寄せました。ソ連兵による日本女性に乱暴をする事件が起きていましたが、子どものいる女性には手を出しませんでした。教会へもやってきましたが私は従軍看護婦だった方の傍に座り、母は弟を抱いていました。私たちが38度線を超えたのは一年後です。（平壌に着くまでのことは母の記憶によりました）

叱責は同じ目の高さで、叱るのは一回だけ、他言は決してしない。

私の最初の記憶は「道路を走り、両脇の家並が後ろに飛んで行く」風景です。手には朝鮮人が営むパン屋からくすねてきたパンがしっかり握られていました。パン屋の主人は教会に抗議に来ました。母は行商に出ていて不在でした。（新京から持ち出したものを売るだけでは生活ができず母は行商を始めたのです）

応対してくれたのは夜には一緒にいる従軍看護婦でした。パン屋の主人が帰った後、教会の階段に立たされ、同じ目の高さで叱責さ

れました。そして「お母さんには黙っておきますよ」と。

この体験から、生徒を叱るときは『同じ目の高さで、叱るのは一回だけ、他言は決してしない』を守ってきました。

五歳以下の子どもは、ほとんど亡くなる

一年後の１９４６年８月、私たちは38度線を越えて、仁川にある米軍キャンプに向けて出発しました。次の記憶は、母の背中を見ながら夜道を歩いている自分の姿です。「お父さんは？」の問いに母は遠くの山際の明りを指して、「あそこまで行けばお父さんがいるから」と答えました。大人に肩車をしてもらい、夜霧がたちこめる河を渡ったり、「右に大きな石」「左に溝」と声を掛け合い夜道を歩きました。実際には７日間の行程でしたが、私は数か月歩き続けたように記憶しています。

米軍キャンプで「はしか」が子どもたちに広がり、ほとんどの子どもが亡くなりました。隣にいた家族の子どもが亡くなり、母親が泣き叫んでいる姿が目に焼き付いています。私と弟は「はしか」にかかりませんでした。母は覚悟したと言っていましたが、新京で「三日ばしか」に罹っていたのだろうと思います。平壌でも学校など大勢の引揚者を収容している施設では、「はしか・疫病」で五歳以下の子どもはほとんど亡くなりました。

物心つく時期の一年を朝鮮半島で過ごす

米軍キャンプに一週間滞在の後、貨車で釜山に移動しました。釜山港に停泊している米軍艦の主砲が左右上下に動いていました。朝鮮海峡を渡り博多湾に入港した引揚貨物船は疫病検査のため数日間湾内に停泊を余儀なくされ、私たちも直ぐには上陸できませんでした。湾内には南方・大陸からの引揚船が多数停泊しており、私たちの隣の船は疫病が出て、一ヶ月間停泊していました。安堵感と長旅の疲れで、多くの人が船内で倒れ、本土を目の前にしてなくなる人も少なくありませんでした。

岡山駅に着いたのは九月中旬の夜中の二時、平壌を出てから一ヶ月後、新京からは一年が経っていました。私は三～四歳、ちょうど物心つく時期の一年を朝鮮半島で過ごしたことになります。

戦争で最も犠牲になるのは子ども・女性

多くの子ども・女性が大陸（中国）や半島（朝鮮）の土となりました。戦争で最も犠牲になるのは子ども・女性であることを、身をもって体験しました。私たち一家三人が無事帰国できたのは母の「ちから」のたまものです。

たなか　ひろし

レンガ造の陸軍官舎の前で（二歳）

がっこう　たのしい！

秋山　正美

新学期が始まって一カ月が過ぎた。身近なところに新一年生がいる。小学生から大学生まで。

彼らにわたしが、「学校はどうですか？」と尋ねると、ほとんどの子どもたちが「たのしい！」と返してくれる。小学生は「せんせいはやさしい。」「きゅうしょくはおいしいけれど、ちょっとだけうどんのりょうがおおい」「しんたいりょくてすとをした。５０ｍもはしったよ」「がっこうへ、いったらたのしいけど、いくのがだるい。ほどうきょうをとおらんとだめだから」いろいろなことを教えてくれる。本当に楽しそうに。

今まで保護者の送り迎えで、自転車の後ろに乗ってこども園や保育園に通っていた子どもにとって通学は大変なこと。わたしの住んでいる地域は小学校は集団登校で、三キロ近い道のりを、高学年が先頭で一列にきちんと並んで、黙々と歩いて行く。ほとんどしゃべらない。登校の様子を見る機会があったが、どこの地区も黙って歩いている。一年生の足に合わせて、歩く速度はゆっくりである。一年生は一生懸命に歩く。三年生の子に「こんな風にみんなも歩いていたんだよね」と声をかけると、目で「そうだよ」と答える。学校でこの子たちは、先生や友だちとお話しできているんだろうかと少し気になった。

大学生になったお孫さんのいる友人が、「まごは、友だちを作るのが苦手だった。県外の大学でやっていけるか、心配で心配で寝られない」「毎日ラインがくる。『今日は寮の友だちと買い物に行った』というのをみたら、嬉しい」と。「県外を選んだのも自分だし、少しずつ成長しているんだ。直に、ラインも来なくなるわ」と話していた。最近会ったら、「本当にこの頃ラインが来んようになった。それもさびいけど、安心した。これで、仕事も手につく。」

新学期は、子どもたちだけでなく親も祖父母も嬉しくもあり不安な時期である。子どもにも友だちが、親にも友だちが、ばあばにも心配事を話せるだれかがいることは力強い。

おかやま教育文化センターが中心に進めている「子育て・教育のつどい２０２３」が近づいている。

「岡山の教育は今」の中で、義務教育にお金がかかるということが、大きな話題になっている。入学時にどれくらいお金が必要か調べてみて、あらためて、「たいへん！こんなに要るん？！」と子育てを終えたものからも驚きの声が。一年だけではなく、これから何年も続くわけだから。どこの家庭でも「子どものため」に何とか工面しているが、何とかならないかと思うこの頃である。

わたしの初孫もこの度新一年生に。入学式前日に「一年生になりたくない」「お母さんがいい」「妹と一緒にいる」「ランドセルもいらない」と言っていたが、翌日から、がんばって登校しているようで、ほっと安心しているところである。

あきやま　まさみ

手をつなぐ

花田　千春

闘病中の夫の手を握り、「このぬくもりを忘れまい」と思ったのはちょうど四年前だった。サクランボの実る頃だった。夫は、すらりと長い指のきれいな手をしていた。姑の手もシミもしわもあまりなく、爪の形もととのったきれいな手だったが、夫の手はその姑によく似ていた。サクランボの真っ赤なつややかな実を見ると、夫を見送った日々ときれいな手を思う。

幼いころ母に手をつないでもらった記憶はない。農家に嫁いで舅姑につかえ四人の子育てと家事や農作業におわれる母には、子どもと手をつないでゆっくりと語りあうゆとりはなかったに違いない。夜明け前に起きて、背中に赤ん坊をしょいながら、薪でご飯を炊き、井戸の水を汲み、たらいで洗濯していた時代。農作業の機械化もされておらず、鍬で田耕し、炎天の田植えに草取り、農家の嫁のなんと過酷な労働の日々だったことだろう。夜中に少なくなったぬるい仕舞風呂に入っていたと話してくれた。今は時々田舎の母の介護に帰省している。別れるとき、母は不自由な足で玄関まで歩いてきて見送ってくれる。「帰るよ。また来るよ」と声をかけて、「ひょっとしたらこれが最後かも」と心の隅で思いながら、節くれだった母の手を握ってから帰ることにしている。

高校生の時のフォークダンス、生徒会主催の練習会がたびたびあった。運動会の片付けが終わった最後には運動場の真ん中で燃える火を囲んでの全校生徒でのフォークダンス。あこがれの先輩と手をつなぐチャンスが巡ってくるかどうか、胸をどきどきさせた。輪の中に入る位置を見定めて曲の終了を計り、あと何番目と思いながら踊った記憶がある。手をつなぐ前の記憶のほうが鮮明で、はてさて、あこがれの人とつないだ時にどうだったのかは、あまりよく覚えていない。

３０代、仕事に子育てや家事にあれこれ、とにかく忙しい日々を送っていた。保育園には門の開くのを待って一番早く登園して、お迎えは最後のほうだった。ある冬の日、お迎え時間を気にしながら仕事を終えてかけつけた。最後まで残っていたのはわが子二人だけで、姿を見ると飛びついてきた。保母さんに挨拶して、荷物を抱え、子どもと手をつないで歩きながら家路を急いだ。とっぷりと日も暮れて、帰り路の辺りの家々にはすでに灯りがともり、だんらんの様子がうかがえる。その時、「あのお月さんのスイッチ、だれがいれたん？」と突然、傍らの幼子のつぶやき。見上げると東の山の上に丸い月がでていた。「さあ、だれかなぁ。うさぎさんかなあ？」仕事と家事・子育てに疲れ切ってみじめだった気持ちがいっぺんに明るくなって、つないだ手を強くにぎりしめた。

ここ数年コロナで握手もままならなくなったが、手と手をにぎると思いが伝わる気がする。肌を通して体温が伝わり、心が伝わるような気がする。大好きな歌の詩に「柔らかな皮膚しかない理由は、人が人の痛みを知るためだ」というフレー

ズがある。つなぎあう手でお互いの痛みや苦しみが少しでもわかりあえ、緩やかにつながりあえたらと思う。ウクライナの戦の火はまだ消えないが、人類は人と人がつながりあってこそ進化してきたのだと信じている。身近な日常生活でゆるやかにあたたかく手をつないでいこうと思う。

はなだ　ちはる

長島愛生園を視察訪問

中山　芳樹

去る四月十九日、私は「障岡連」の仲間と長島愛生園を視察訪問しました。

過去、私は、昭和五一年豪雨災害で住居の救助のために訪ねたことはありましたが、このようなかたちで訪問するのは初めてでした。

二台の車に分乗し、一時間余りで愛生園に到着しました。小雨が降っていた岡山でしたが着くと雨も上がり、早速学芸員の方のアナウンスを聴きながら史跡めぐりをしました。

まず行ったのが収容桟橋です。当然橋のかかっていなかった時代、入所者は舟でこの桟橋まで来、家族と別れを惜しんだのです。なかには幼少の子どももいたそうです。次に納骨堂に行きました。この中にはなくなってもなお故郷へ帰れない三千六百柱を超える遺骨が眠っているそうです。それも半数以上が本名ではなく偽名だそうです。その他にも監房、少年農園など一時間程かけ案内を受けました。

雨上がり霧にむせびつ愛生園会長は語る「終の棲家」を
六歳では母子の別れ告げしとぞ愛生園の朽ちたる桟橋
半数は偽名で削らる納骨堂本名名のれぬらいの歴史は

お知らせ

昨年度より「ネットワーク通信」に連載してきました「いじめを考える」総集編（３８頁）を作りましたので、ご入用の方は下記メルアドに「いじめ資料送れ」と打って、送信してください。

できましたら感想や意見などをいただけると勉強になりますので、よろしくお願いいたします。　福田　求

Eメール：nrp26373@olive.megaegg.ne.jp

いじめを考える　＜PartⅢ❺＞

相談員　福　田　　求
（“ののはな”教育相談）

子育て教育のつどい２０２３のご案内

記念講演
「私らしく生きる～ありのままをうけいれて～」

講師　　瑠璃真依子さん

岡山県発達障害者当事者会「どろだんごの会」代表　自閉スペスペクトラム症ASD注意欠如多動症ADHD当事者　岡山大学理学部数学科卒業後、公立中学校教員として２年間勤務。その後休職を経て退職。現在は、ＮＰＯ法人　岡山高等学院に勤務している。また、当事者の声を伝えるため、岡山を中心に講演活動をしている。

日時　　２０２３年５月２１日（日）

受付　　9:15

第１部　　開会　　9:40

講演　　10:00～11:20(オンラインで配信)

第２部

岡山の教育は今（報告と交流）13:00～15:10

①「乳幼児を取りまく環境と教育」

②「学校統廃合と子ども地域」

③「教育にかかるお金」

場所　　おかやま西川原プラザ）（岡山市中区西川原２５５）　☎086（272)1923

申し込み　参加費は無料です。**「オンライン視聴」の方は、メールで必ずお申し込みください。**

okayamakyoubun1037@feel.ocn.ne.jp

主催　　子育て教育のつどい２０２３実行委員会

先日高校の卒業式が行われた様子が、新聞やテレビで報道されていました。コロナで入学時よりマスクの着用で、三年間素顔を見せたり見たりすることのなかった卒業生たち。新たな出会いに楽しみと同時に不安も多いと思いますが、自分らしく前向きに新たな一歩を踏み出して！と願います。

さて、報道では、「マスク着用・・・ばらつき」のような見出しでしたが、それは一つの現象にすぎず、そのことを選択した学校や生徒たちの思いは複雑だったと思われます。「卒業式はマスクなしで」といわれても、そう簡単なことではなかったのです。大人が考える以上に。

みなと同じことが求められたり、一律のことが押し付けられたりすることへの抵抗のひとつかもしれません、最近児童生徒数の減少といわれる中でも、不登校の割合が高くなっています。そうした中、多様な学びや生き方を保障することが求められ、たくさんの通信制の高校が誕生し、定時制高校の受験倍率も高まっているように思います。

子どもたちが本当に大事にされ、未来に希望が持てるようにするのが、大人の役割だと思っています。

あきやま